

取り締まり、民族統合を掲げ、国境域への関与を強める政策が施行されている。国境域を流れるメコン川では、上流の中国にダムが建設されたため、下流の国で水位減少や洪水増加が起きている。いずれにせよ、国家の周縁に位置する国境域と少数民族は、今や各国の政治経済の影響が真先に表面化する重要な対象になった。今後、研究のさらなる発展が期待される。

吉野耕作、『英語化するアジアトランスナショナルな高等教育モデルとその波及』名古屋大学出版会、2014年、234 p.

奥村みさ*

はじめに

共通語をもつことは人類の夢である。英語はその人類の夢を叶えることができるのだろうか。少なくとも世界中で英語は熱心に学ばれ、英語で学ぶ人々も増加し続けている。この世界的傾向の中で多くの先進諸国では英語教育の民営化が進み、英語というソフトは一大教育産業を作り上げた。英語母語国への右肩上がりの留学増加から、英語学校の乱立、英語資格試験対策や早期英語教育などの分野に多くの企業が参入している。英語教育が社会・文化にもたらす影響や資本主義経済の中で産業化していく現象、また教育戦略（政策）などに関する研究は枚挙にいとまがない。著者との共著の中でKooはマレーシアの高等教育における英語をズバリ“文化的商

品 cultural commodity” [Koo 2009] として扱っている。英語関連産業は21世紀アジアで最も成長し、注目を集め、かつ普遍的に共有されている産業といっても過言ではない。

その中でも著者はマレーシアで進行中の注目すべき教育産業の事例として「トランスナショナルな高等教育モデル」をあげ、その波及効果について具体的状況の中で「英語化するアジア」を捉えようとしている。トランスナショナルな高等教育モデルとは「アジアの民間のカレッジ（その原型は塾・予備校や専門学校であり学位授与能力はない）がアメリカ、イギリス、オーストラリアなどの諸大学とのリンケージを通して、アジアの自国にしながらにして「西洋英語国」の大学の学位を取得することを可能にした仕組みのことである」(p. 10)。

本書の概要と批評

現代世界ではさまざまな人間の諸活動においてグローバル化に伴いコミュニケーションの手段として英語が使われる領域が拡大している。この過程を著者は「英語化」と呼ぶ。

序章においては、この英語化に対する応用言語学における議論の紹介、本書の構成と研究調査方法について述べている。本書では英語の社会的・文化的影響よりも、英語を教授媒体言語とした教育機関における教育モデルに焦点を当てている。具体的にはアジア英語圏文化の一角を担うマレーシアの大学教育のグローバル化、トランスナショナル化について紹介し、ひいてはそれを普遍的なモデルとして提示している。

* 中京大学国際英語学部

第1章では「エスニズムとマルチエスニシティ」と題し、マレーシア多民族社会の構成と展開について考察している。

本書の中心をなすのは第2章から第7章である。そのうち第2章と第3章では、マレーシアから生まれた高等教育モデルを事例として、英語を教育媒体とする高等教育の展開、そしてその波及効果について論じている。まず国民教育の中心である公教育のシステムを詳細に紹介し、民間の英語を教授媒体とした教育機関の参入・発展過程を辿り、その中でトランスナショナルな高等教育のプログラムの仕組みを実際の事例をあげながら説明している。

第4章では、マレーシア社会ならではの独特な現象を分析している。このトランスナショナル・モデルにより高等教育が英語化し、そしてその英語化によってエスニック関係に変化がもたらされていることを指摘している。マレーシアは独立時にマレー語を国語とし、国立大学での正式な教授言語はマレー語と定めた。ところが、トランスナショナル・モデルが教育産業として発達することで高等教育の民営化が進行し、その教授言語は英語であることから、教育の英語化も同時進行することとなる。正確にはポストコロニアルなマレーシア社会において「再英語化 re-Englishization」が進行することにより、旧植民地からの社会的・文化的遺産である複合社会が再構築されつつあるのだ。またマレーシアではブミプトラ政策（マレー系優先政策）により、国立大学ではマレー系学生を優先的に入学させていることから、トランスナシ

ナル・モデルの高等教育機関では必然的に非マレー系（特に華人系）の学生が多く学ぶこととなった。マレー系間でも教育教授言語の違いによりエスニック集団内で分化が起きている。

第5章と第6章ではこの制度の国際的伝播についても言及している。すなわち、元来はマレーシアの国内で英・米・豪に留学する経済的余裕のない社会層を対象にしたカリキュラムだったのが、同様の事情を抱える他のアジア諸国やイスラーム圏からの学生たちがこの勉強機会を利用するようになってきた。今まで、英語圏の学生たち、特に英語を第二言語として（English as Second Language, 以下 ESL）、多くの場合公用語として使用する国々の学生たちにとって留学する場合は、英・米・加・豪などの英語を母語とする（English as Native Language, 以下 ENL）国々の大学に1年次から直接留学するしか選択肢がない、と思い込んでいたが、彼らにオルターナティブの勉強機会を与えることとなった。この留学生の流れを変えたことはグローバルな人の移動を議論するうえでも注目すべき重要な点である。特に中国からの留学生がマレーシアからオーストラリア経由でアメリカへ、という人の流れの中で華人系マレーシア人が文化的仲介者の役割を担っていることについては Yoshino [2009: 80] に詳しい。

本書の具体的調査方法については、第3章から第6章の冒頭でそれぞれ述べている。但し、マレーシアにおける社会調査の特徴として統計資料や公のデータ入手が困難である

ことがあげられる。またエスニック問題は「差しさわりのある問題 sensitive issue」として公のデータへのアクセスがかなり制限されている。本書ではそれを補うため、質的アプローチとして聞き取り調査を複数回実施した。2002年3月から2013年8月まで合計1,400時間に及ぶ聞き取り調査を実施した。長期間にわたる忍耐強い計画的な定点観測をもとに、満を持して書き上げられたのが本書なのである。

第7章では、英語化の進行によるマレーシア複合社会の変容について分析している。英語使用とポスト複合社会のマルチエスニシティは植民地主義の遺産である。この遺産が21世紀の現在、どのように変化しているのか。ポストコロニアルな現状において英語化が引き起こす重層的な社会的インタラクション・ネットワークの展開を分析対象としている。

英語とマーケティングについても言及している。トランスナショナル・モデルを構築した経営者たち自身が英語にたけている点をKDU(=Kolej Damansara Utama)の先行事例等で紹介している。経営者たちは英語を使うノウハウに習熟しており、ENL諸国出身者に受けのよいネーミングをつけることにこだわった。たとえば、アメリカ人はKDUの“U”を“University”の略だと勘違いし、この名称は受けがよかった。つまりは「売れる」名前である。英語とマーケティングとの関係に関してはその他、本文の複数個所而言及している(pp. 73-78, p. 85, p. 129)。

本書の特徴のひとつとして、グローバル社

会におけるマレーシアの立ち位置に注目したことがある。マレーシアは「半周辺」に位置しているからこそ、当初は国内の高等教育の補完的なシステムとして始まったトランスナショナル・モデルが1ヵ国内に留まらず、周辺国の留学生を先進国(ENL諸国)へ送る仲介的な教育産業として機能している、と主張する。

以上が本書の中心をなす議論である。だが、「英語化するアジア」の社会・文化の現状について最も具体的に論じているのは最後の補論「グローバル・メディアとローカルな言語状況」においてである。CNNインターナショナル(=Cable News Network International)におけるアメリカ英語の「脱響」化、異なる英語圏のクロスオーバー(p. 206)の部分は、シンガポールの2言語政策を研究している評者が最も興味深く読んだ箇所のひとつであった。

今後の課題

すでに要約を紹介しながら、本書の着眼点の独自性、そして英語を媒介言語とする高等教育プログラムをグローバル経済のシステムの枠組みで捉え、人の国際移動とそれによる文化的影響について評論してきた。

ここでは提示されたモデルについてもう少し考えてみたい。まず、このモデルの国内学生への利点としては、いながらにして英語教育が受けられることである。特にモスリム家庭では女子学生が親元から通えるということで価値観の継承の問題が解決できる。他のイスラーム圏から我が子をマレーシアに送る保

護者たちにも安心感がある。

だが、これはこのモデルに限らないが、教育の民営化、つまり私学の大きな悩みとしては資本主義体制の中で教育を実施する、という制約がある。著者も述べているように教育の質的管理の問題 (p. 178) が真っ先にあげられよう。どれだけ質の良い内容を教授できるか、カリキュラムの充実と教員の確保の問題がある。本書ではカリキュラムの科目にまで言及していないが、システムだけでなく科目の内容が重要である。たとえば歴史教科書の選択基準、という史観とナショナリズム、文化的アイデンティティなどの問題が人文系・社会科学系の教授内容と関わってくるし、また理系コースを選択する学生たちに果たしてこのシステムが有効か、という問題もある。本書では、トランスナショナル・モデルのこれら教育内容への影響を論じきったとはいえない。

タイトルが『英語化するアジア』なので、このモデルの社会・文化的側面に関してもう少し具体的な議論があるとさらによかった。たとえば再英語化の議論の中で複数の ENL 諸国を渡り歩いて留学することによる英語の混乱、またはこのモデルで留学帰国した若者層が増加していくことで具体的にポストコロニアルなマレーシア複合社会におけるエスニック集団の相互関係がどのように変化したかなど。あるいは、本来は社会的には最も興味深い議論のひとつであるこの問題についてはマレーシアの特殊事情を鑑み、著者はあえて避けたのかもしれない。

「英語化するアジア」の社会・文化的影響

に関してはおそらく次の著書でさらに詳しく論じられることになる (p. 187 注 15)。最後の補論はその予告とも読める。次作も心待ちにしたい。

引用文献

- Koo, Y. L. 2009. Englishization through World English as a Cultural Commodity: Literacy and Practices in Global Malaysian Higher Education. In Kwok-kan Tam ed., *Englishization in Asia: Language and Cultural Issues*. Hong Kong: Open University of Hong Kong, pp. 88-118.
- Yoshino, K. 2009. Englishization of Higher Education in Asia: A Sociological Enquiry. In Kwok-kan Tam ed., *Englishization in Asia: Language and Cultural Issues*. Hong Kong: Open University of Hong Kong, pp. 70-87.

柳澤 悠.『現代インド経済—発展の淵源・軌跡・展望』名古屋大学出版会, 2014 年, 426 p.

福味 敦*

本書は著者が長年にわたり取り組んできたインド経済・社会研究の集大成であると同時に、我が国の同分野における研究の到達点というべき大著である。その議論は明確で、現代インドの経済成長は、長い年月の末に形成された「基盤」の上で実現しえたこと、かかる基盤の形成には、農村経済の発展とそれとともに下層階層の自立、そして国家主導の輸入代替工業化戦略が重要な役割を果たしてきたことが明らかにされる。

* 兵庫県立大学経済学部